

# モンゴル国出張報告書

2013.7.29-2013.8.2

松岡研究室

-目次-

1. フィールドワーク概要
2. 研究チーム
3. スケジュール
4. 研究内容

## 1. フィールドワーク概要

### プロジェクト名

「北東アジアの乾燥地帯生態系における生物多様性と遊牧の持続性についての研究」

本フィールドワークは、日本の環境省による「モンゴルにおける砂漠化対処事業」の平成 25 年度における事業推進を目的としたものである。同プロジェクトにおける目的は、環境・持続的発展課題に関する政策的な示唆をモンゴル政府に供与することである。本研究は、植物地理学、気候学、水・エネルギー循環、社会学・経済学の 4 分野で構成されている。(第 4 分野社会学・経済学：早稲田大学松岡教授主導)

本出張では、現地研究者や政府関係者、遊牧民など、プロジェクト関係者とのミーティングを通じて今後の研究の方向性を検討することを目的としたものである。

図 1：モンゴル国地図



## 2. 研究チーム

- 松岡俊二（早稲田大学アジア太平洋研究科 教授）
- 中村洋（人間・環境フォーラム 研究員）
- 永長大輔（環境省）
- Qin Ziyi（早稲田大学アジア太平洋研究科 博士課程）
- 野口恵子（早稲田大学アジア太平洋研究科 修士課程）

## 3. スケジュール

日付	活動内容	場所
2013.7.29(月)	―出発 KE704 13:55 成田 16:20 仁川 KE867 19:20 仁川 22:30 ウランバートル	日本 ウランバートル
2013.7.30(火)	―JICAモンゴル事務所 ―地生態学研究所 ―アジア開発銀行モンゴルオフィス ―ウランバートル近くの郊外にて草原視察	ウランバートル
2013.7.31(水)	―工業・農牧業省 ―在モンゴル日本大使館	ウランバートル
2013.8.1(木)	―モンゴル農業大学 ―MCAプロジェクトオフィス ―モンゴル国・自然環境グリーン開発省 ―マンダルゴビ地域関係者(バグ長、ソム長、 アイマグ農業局長、家畜ユニット課長)	ウランバートル (仁川空港)
2013.8.2(金)	日本帰国	日本

#### 4. 現地活動報告

7月30日(火)

##### ◆ JICA モンゴル事務所

###### 加藤所長とのミーティング

環境省委託事業である本プロジェクトの概要説明と、今後の方向性について話しあった。ミーティングの中では、近年のモンゴルの経済状況や JICA の活動の近況についての話もあった。また、本プロジェクトの結果を JICA の今後の活動に反映させ、経験を共有していくという方向で話を終えた。

図2 JICA モンゴル事務所



## ◆ 地生態学研究所

所長に対し、これまでの調査報告、また本プロジェクトの概要、今後の計画・方向性について説明を行った。遊牧民や地域行政機関（職員）、研究者間の関係性について、それぞれの考えの相違を克服することの難しさなど、所長ご自身の経験に基づいたお話を伺うこともできた。また、牧草地に関する制度が未だに存在していないことも、政府を悩ませているとのことだった。更に、新しい財政計画の策定や、地方分権化を進めることによって、地域政府の環境保全政策推進に影響を与えられるだろう、とのお話もあった。今後、災害に強い遊牧社会を目指してプロジェクトを進めて行くに当たり、遊牧民・政府双方にとって意味のあるものとするため、どのようにゴールを位置付けるかという検討課題も浮かび上がった。

## ◆ アジア開発銀行(ADB)モンゴルオフィス

Nyamdorj 氏より、Bayankhongor 地域で現在進行中の ADB のプロジェクトについてお話を伺った。ADB のプロジェクトは、昨年からは動しており、現在までのところ非常に良い成果がでてきているとのことだった。遊牧民内での協働を奨励し、遊牧民の協同組織を基盤として実施がなされている。また、月ごとに実施状況の調査もしている。ADB のプロジェクトでは、遊牧民からのフィードバックを得るために、彼らのアイデアや感情を表現するチャンネルを確保するアプローチ方法として“double check”を取り入れていた。

## ◆ ウランバートル近郊での草原の視察

ウランバートル近郊の草原でフィールドワークを行った。ゾド時に牧畜の食糧として頼りになる植物とされているデルスなどを視察した。

図3 ウランバートル近郊の草原



図4 草原（デルス）の視察・調査



7月31日（水）

#### ◆ 工業・農牧業省

工業・農牧業省（以下、工農省）の方からの紹介を受けた後、本出張の目的、今後の日本-モンゴル間の協力について話し合った。工農省の方から、近年の遊牧民牧草地利用に関するモンゴル政府の政策について説明して頂いた。持続可能な牧草地管理を維持するために、毎年11月に各ソム、各アイマグから牧草地利用計画が提出されることになっているとのことだった。また、モンゴル政府は、境界線を超えた遊牧活動に対して、他のアイマグから来た遊牧民にも利用可能なオープンアクセスの公共牧草地をアイマグが定めるという政策を持っている。さらに、アイマグ、ソムに渡る遊牧民が利用可能なオープンアクセス可能な牧草地の設置の重要性についても述べていた。

図5 工業・農牧業省入り口



## ◆ 在モンゴル日本大使館

### 林参事官とのミーティング

本プロジェクトの説明を行った後、林氏からはプロジェクトに反映できるようなモンゴル生活での経験談・情報等を伺った。林氏によると、現在のモンゴルの経済状況や画策されている養蚕業事案についてなど興味深いお話の数々を伺うことができた。また、本プロジェクトがモンゴル-日本間の関係の発展に寄与することが期待できるとのコメントも頂いた。近年のモンゴルは鉱業に依存しており、多くの環境問題にも直面している。モンゴルが持続可能な発展を遂げて行く上で日本が果たすべき役割は、今後一層重要なものとなるだろう。

8月1日(木)

## ◆ モンゴル農業大学/牧畜研究所

牧畜研究所に、本プロジェクトの概要を説明し、調査を進める上での協力を依頼するために訪れた。遊牧民コミュニティに関連する機関での経験がある教授から、MCAの活動についてなどの話を伺うことができた。遊牧民は、科学的な情報よりも伝統や過去の経験・学びなどに基づいた決断や行動を取る傾向があるとのことだった。

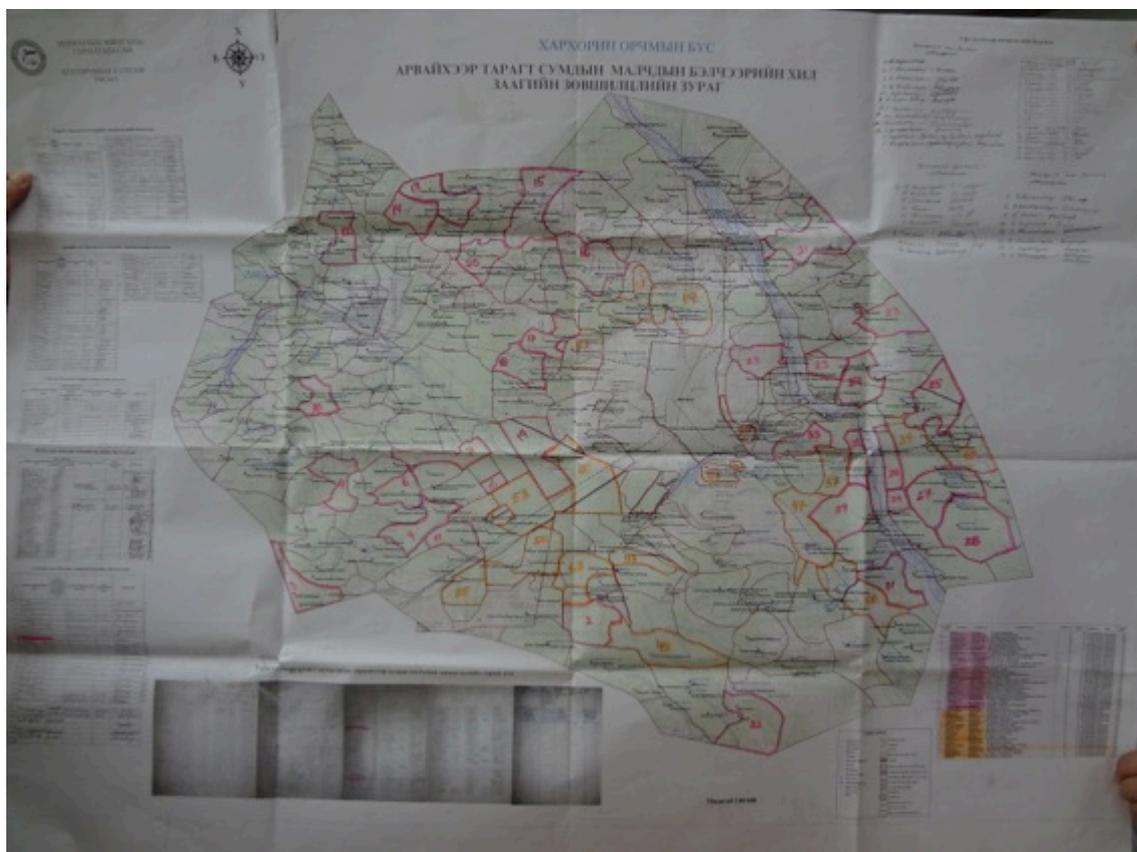
## ◆ Millennium Challenge Account (MCA) Project Office

プロジェクトマネージャーの方へのショートインタビューを行った。MCAによる現在継続中の都心部周囲における放牧地に関するプロジェクトは、2009年から始まっており、今年2013年で終了する。このプロジェクトは、モンゴルの3大都市（ウランバートル、エルデネト、ダルハン）に近い都市部周辺で施行されている。遊牧民達は、遊牧地使用に関する契約を、地域政府と15年で結んでいる。都市部周辺の土地のリース活動についてであるが、これは毎年政府に対して土地のリース代を支払うことで、土地管理や拡大、他のサービスの向上な

ど、遊牧民らが必要としている支援を行うことを狙いとしている。また、the Property Rights Project では、井戸や他の牧草地のインフラ管理・メンテナンス等を提供するための計画も進展している。関連する出費は、都市周辺のリース活動の下リースするに値する遊牧民グループの選出基準である関係するステークホルダーの貢献度、前の結果に応じている。

The Property Rights Project 全体として環境的・社会的持続性を保証するために、MCA-モンゴルでは様々なステークホルダー（女性や脆弱なグループを含む）が the Property Rights Project の発展・実行過程に参加する機会を持つことを通じ、定期的に公に開かれる相談の場に携わっていく方向である。さらに、環境評価のフレームワーク（社会的評価を含む）と EMP が、(a)the Improvement of the Land Privatization（土地民営化の改善）と Registration System Activity（登録システム活動）下にある様々なオフィスの向上、(b)the Peri-Urban Land Leasing Activity（都市周辺部のリース活動）下にある建設活動、の開始に先駆けて完了することになっているとのことだった。

図6 MCAによるプロジェクト資料



#### ◆ 自然環境グリーン開発省

自然環境グリーン開発省内の国際協力部門担当ディレクターの方とのミーティングを行った。このミーティングでは、UNCCDに関するモンゴル-日本間の協力について話し合った。研究の紹介と、研究活動計画について説明した後、将二国間の協力関係の今後の更なる発展についても確認し合った。

図7 ミーティング風景



#### ◆ マンダルゴビ関係者（ソム長、バグ長、課長）

今年度、本プロジェクトを実施するための前段階として、マンダルゴビ関係者とのミーティングを行った。ソム長を始めとし、バグ長、アイマグ農業局長、家畜ユニット課長らにマンダルゴビからウランバートルまで出向いてもらい、

Flower Hotelにてプロジェクト実施に向けてのミーティングを行った。まず、現段階までの研究内容・成果について説明をしたのち、ソム長らからの話を伺った。遊牧民に関する状況についてのソム長らの話では、近年若手遊牧民達の放牧活動が多く地域で増加しているとのことだった。